

2023年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」3月号



名前 _____

お知らせ

◇ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。

10:15～10:50 地下フェロシップホールにて

◇ 受付で出席表に記入し、グループ分けの番号札を引いてから着席ください。

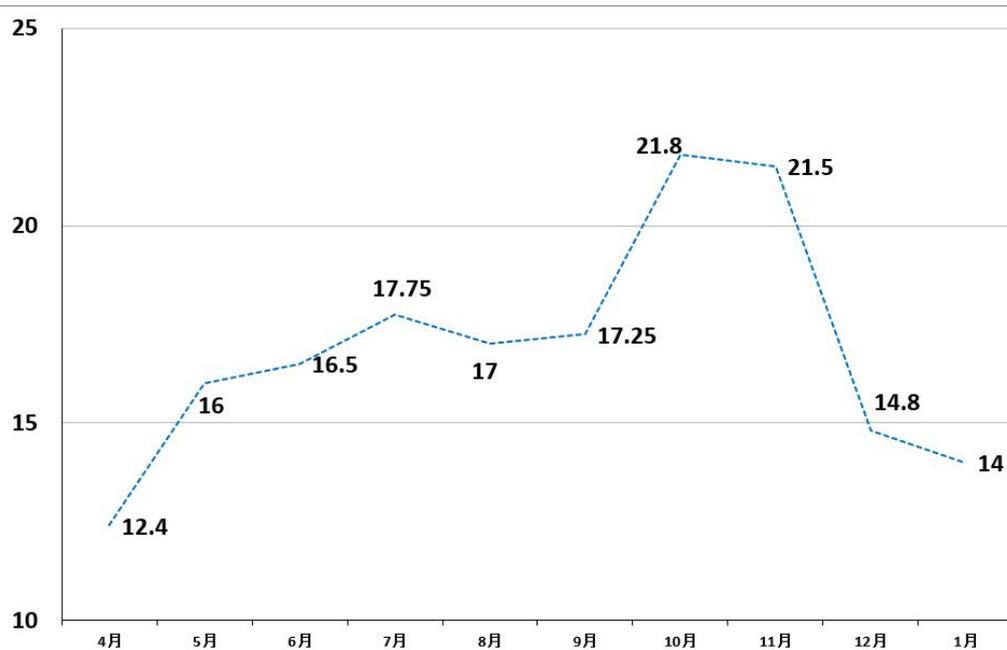
◇ 後から来られる方のために、前列への着席にご協力をお願い致します。

◇ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。

◇ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

◇ ショートメッセージ動画は教会ホームページ上でも視聴できます。10:15のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと思われる方など、ぜひご活用ください。

学びの輪を広げましょう！



礼拝と学びがバプテスト教会の二本柱。

テキストをお読みくださっている皆様も、ぜひ毎週日曜10:15～の成人科にご出席ください！

今月の執筆者

(左: ショートメッセージ 右: 聖書日課)

49課: 田中由記子姉 工藤征治姉

50課: 郷 健人兄 栗山義亜兄

51課: 宇佐美典子姉 渡部和子姉

52課: 郷 秀男兄 小澤敬一兄

53課: 郷 秀男兄 渡部和子姉

特別コーナー

～ある日の分かち合い～

成人科では毎週、ショートメッセージを聞いた後にグループに分かれて分かち合いをしています。一人ひとり異なる歩みを経てイエスさまと出会った私たち。同じ箇所を読んでも与えられる思いは様々で、分かち合いはいつも恵みに溢れています。

今回は特別に、第45課「良い羊飼いのもとで」（ヨハネによる福音書10章7～18節）で行われた分かち合いの様子をご紹介します。

Aさん

今日の分かち合いのテーマは、「あなたは良い羊飼いの声を聞き分けることはできますか？ほかの声に惑わされてしまったことはありますか？また良い羊飼いのもとでどんな群れを作りたいですか？どのような群れに加わりたいですか？」です。私はほかの声に惑わされてしまうことは、誰でもあると思うんです。でもこれは間違っているなど気づければ羊の門のほうへ戻ってくることはできると思います。良い羊飼いのもとでどんな群れを作っていったらいいのか…みなさんどう思われますか？

Bさん

ほかの声に惑わされてしまったというか、30数年間惑いに惑った末に、羊飼いの声を聞いてここに来ましたという感じです。自分から間違った方向に出て行ってしまったという感じですかね～誰かのせいとか何かのせいとかいう感じではなく自分から惑っている…あとから気づくんです。自分の考えだけでやってしまったと気づくきっかけはやはり教会に来た時ですかね。礼拝でメッセージを聞いているときや教会学校のご奉仕のときに気づくことが多いので、教会に来れることは感謝ですね。

Cさん

僕は惑わされたわけではないけど、自分から創価学会や原理主義教会に行ったことがあります。

Aさん

イエスさまと出会ったあとで、あえて行って見たのですか？

Cさん

そうです。どんなことを考えているか知りたくてね。行ってみたいと思って。創価学会はイエスさまの福音とは全然違いました。原理の方は土台は聖書だけど、仏教の考えも混ざっていて、でも一番大事にしているのは原理講論でした。アダムとイブがヘビに騙されサタンの血が体内に入り込んだから人は罪人なんだって言ってるのね、もうめっちゃくちゃなのよ。

良い羊飼いの群れって、クリスチャン同士は気がおけるというか、信用できますよね。商売してるといろいろな人と接する機会はあるけど、自分のことを第一に考え自分の利益ばかり追求する人が多いです。そういうのはいやだねって思う。キリスト者同士だと生涯の友になれるよね。お互いのことを思いやれる気持ちは安らぎだし、そういう群れがいいと思う。ぶどう園の農夫のたとえで、朝からいても遅れてきた人でも、神さまからの恵みは同じってあるけど、前からいる人も後から来た人もみな同じ恵みに与れる。そういう群れでいたいと思います。

Dさん

私は40歳でバプテスマを受けたので、それまではひとり放牧状態でした。惑わされるというよりは聞かないように自分自身の思いに従って生きていました。決心しようと思った礼拝のメッセージが迷い出た一匹の羊を羊飼いが探し出すという箇所だったんです。あ、自分は羊なんだと気づいたんです。40年かかったけどここにこれてよかったなと思っています。

Aさん

結婚前にA子さん（奥様）とお付き合いされていた時は、Aさんはクリスチャンだと知っていたんですか？

Dさん

もう最初からそれはオープンでした。自分のアイデンティティはイエスさまなんだって言ってたし、そうなんだねと理解していました。教会にはすごく誘って来ていました。でもそのころは残念ながら羊飼いの声は聞かないようにしていたんです。宝石とか壺とかいらぬし興味ないし、とっていたんです。囲いの中に入れてよかったです。

Eさん

イエスさまが羊飼いということはよく聞くしわかるんだけど、命を捨てるとか、命を守る、命を生きるために私がいるなど、命という言葉が今日は心に残りました。礼拝のメッセージでも永遠の命についてのお話がありましたが、私たちが何のためにイエスさまについて行くのか、そしてイエスさまから与えられる大きな恵みは永遠の命なんだって改めて思いました。

どのような群れになりたいかについてですが、み言葉を聞いて分かち合い、また証しを聞いたりして、こんな導かれ方があるんだとか、こんな恵みがあるんだということが知れることがうれしいです。友達の付き合いのような好きな人同士の集まりではなく、主によって集められた人達との仲間感がとても好き。一生の友は教会ならではだと思ふ。このまま歳を重ねていっても老後も神さまと教会に繋がっていれば安心だなんて思えます。この群れから離れたくないです。

Bさん

私も！そう思います。

Fさん

中学生のときくらいからキリスト教に接していて、教会学校に参加したこともあります。ミッション系の学校にも通っていましたが。求めていたのかもしれないけれど、長い間、迷っていたんだと思います。だいぶ時が経ち、子どものことですごく悩んでいた時に、教会に行ってみようと思いました。すごくあたたかく接していただいて、アドバイスもあり、一歩踏み出すことができ、教会の群れに加えていただきました。それから何十年も教会に来ていますが、教会はやっぱりすごく安心感があり、自分の気持ちも安定します。ふらふらしちゃうこともあるけれどこれからも、この群れの一員でいたいなと思います。

Aさん

神さまが中心にいる群れだから家族のようで、主につながる家族だから安心感もあり居心地がいいということですね。みなさんありがとうございました。ひとことお祈りして終わりにします。

皆様のご参加、心からお待ちしております！

解説・ヨハネによる福音書③

【 イエスさまが言われた帰天後の時代・迫害の時代 】

ヨハネ福音書を読むときにこのイエスさまの言葉を忘れてしまうと解釈を誤ることにつながります。最後の晩餐のときに言われた言葉です。(加藤常昭先生・ヨハネ福音書講解より)

ヨハネによる福音書 16章1～2節

これらのことを話したのは、あなたがたをつまずかせないためである。

人々はあなたがたを会堂から追放するだろう。しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る。

- ユダヤ人キリスト者はユダヤ教のシナゴークから追放されるだけではありません。
- ユダヤ教は当時のローマ帝国では公認された宗教でした。
- 原初のキリスト者の群れはユダヤ教の一分派と捉えられていました。
- ローマ帝国での皇帝崇拜

紀元前29年アジア州のベルガモが皇帝を神として礼拝したいと申し出て正式に認められました。以後、神として皇帝を讃える習慣はローマ帝国内に急速に広まってきました。皇帝を神の子と認めないキリスト者は当然に迫害の対象になりました。ユダヤ人も異教の神への犠牲を捧げることを拒絶したため迫害を受けることになり反乱を起こしました。紀元70年にユダヤのローマに対する反乱は敗れエルサレムは崩壊し、神殿は破壊されました。

- ユダヤの人々は信仰の拠点・中心を失いました。
- ユダヤ教の信仰はますます結束し、純潔を守ろうとしたのです。
- 当時、キリスト者はユダヤ教徒と同じくシナゴークで礼拝を共にしていました。
- ユダヤの人々は次第にユダヤ人キリスト者を異端として滅ぼされるように願うようになります。
- ユダヤ教でもないローマ帝国が公認しない宗教にキリスト者は立ったのです。
- それはユダヤの共同体の社会から追放されることでもあります。
- ローマ帝国の支配者からも許されない存在となったことを意味します。こうして民族を問わないキリスト教が始まりました。このような背景で激しい迫害に会いながらもキリスト者はディアスポラのユダヤ人のシナゴークなどを用いて福音を語り始めて行ったのです。

【 イエスさまと全く同じように助けてくださる聖霊の働き 】

(鈴木崇巨先生・一年で聖書を読破する より)

ヨハネ福音書は私たちにとても大切なことを伝えていています。それは「弁護者」すなわち「聖霊」を私たちのもとに送ってくださるとイエスさまは約束してくださっているのです。だから、何も心配することはないと言っておられるのです。

ヨハネによる福音書 16章7～8節

しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。

その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする

- 「聖霊」とは「神の霊」、その霊の力であり神の位格を持たれた存在です。
- 「聖霊」は天地創造のときから働いておられました。
- 「聖霊」はイエスさまの十字架と復活を機に強く働き始められました。
- イエスさまはご自分が天に帰られたとしても「聖霊」が私たちと共におられることを約束してくださいました。使徒パウロはイエスさまの十字架と復活によって私たちに与えられる最大の賜物は「聖霊」であると言っています。

ローマの信徒への手紙 5章5節

希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

聖霊は私たちに何をされるかをイエスさまは語っておられます。

- 「聖霊」は私たちに罪を悟らせる。
私たちは罪の意識なくしては、自分が救い主を必要としていることが分からない
- 「聖霊」は私たちに義を確信させる。
十字架のイエスが神の子と私たちに確信させてくださる。
- 「聖霊」は私たちに裁きを確信させる。
私たちは皆、神の裁きの前に立たなければならないという確信を与えられる。
私たちが自分の罪を悟り、キリストの義を確信し、来るべき裁きを確信したときに「聖霊」はさらに働いてくださり、キリストの十字架に私たちの救いがあり、キリストと共に私たちも赦され裁きから救い出されるという恵みを私たちに与えてくださるのです。

ヨハネによる福音書 16章13節

しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。

「聖霊」は私たちが何かわからずとも求めたとき、叫んだときにイエスさまがそうであったように傍に寄り添い、愛の眼差しでイエスさまに執り成し、導いてくださるお方なのです。

参考図書 「バイブルガイド」マイク・ボーマント著 2015年 いのちのことば社
「ヨハネによる福音書・講解説教」加藤常昭著 1997年 ヨルダン社
「一年で聖書を読破する」鈴木崇巨著 2016年 いのちのことば社
「ヨハネ福音書 下」ウィリアム・バークレー 1981年 ヨルダン社

第49課「わたしはまことのぶどうの木」

聖書箇所：ヨハネによる福音書15章1-17節

主題聖句：わたしはぶどうの木、あなた方はその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。(5節)
わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。(12節)

エルサレムに入られたイエスさまは、十字架にかけられるまでの時間が多くないことをご存知でした。イエスさまには、弟子たちに教えたこと、伝えたいことがまだまだたくさんありましたが、神さまが備えられた時なので、仕方ありません。残された彼らが、悲しみ、戸惑い、困惑を乗り越えて立ち上がり、神さまの愛を伝えていくことができるようにと願い、「これだけは伝えたい」という思いで語られた言葉が、14章から続きます。その内容は、イエスさまにつながり、互いに愛し合うようにと励ますものでした。

イエスさまは、当時のユダヤの人々の生活に結びついた、わかりやすいたとえを用いて、お話をされることがよくありました。本日の箇所では、イエスさまはぶどうの木、イエスさまの父である神さまは農夫、そして、私たちはぶどうの枝であり、その枝の先には神さまの愛の実が実るとおっしゃっています。とてもわかりやすいたとえですね。

神さまによって造られた私たちは、まことのぶどうの木であるイエスさまに結ばれ、イエスさまから愛という栄養と命の水をいただいて、生かされています。そして、天の父なる神さまがそのぶどうの木を慈しみ育ててくださっているのです。ぶどうの木から離れてしまうと、枝は枯れてしまい、枯れれば焼かれてしまいます。しかし、つながっていれば、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制という豊かな実を結ぶのです。これらの実は、人間の努力や技術で実るものではありません。神さまのみ力によってのみ、実るものです。

5節の「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば」の「つながる」と9節の「わたしの愛にとどまりなさい」の「とどまる」は同じ「メノー」という単語が使われています。イエスさまにつながり、イエスさまの愛を受けるということは、イエスさまの愛の中に留まり、自分の心の中にイエスさまが留まっておられるということです。

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。(9節)
わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。(12節)

これが、イエスさまが弟子たちに一番伝えたかったメッセージではないでしょうか。愛の連鎖です。このようにして世界中に愛が広がることを心から願います。

そして、イエスさまは弟子たちに対して、もはや僕ではなく、友だとおっしゃいます。イエスさまは、私たちのために命を捨ててくださいました。これが神さまの大きな愛です。しかし、これは、「友のために犠牲となりなさい。それは素晴らしいことです。」と、私たちにも友のために命を捨てることを強要しているのではありません。それができるのはイエスさまだけです。ですから、私たちは全てを主に委ねるのです。

しかし、イエスさまにつながっていても、それで満足してしまって、何もしなければ、実を結ぶことはできません。

あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、

また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、

わたしがあなたがたを任命したのである。(16節)

世界中のあちらこちらに、また、私たちのすぐそばにも、イエスさまをまだ知らずに、暗闇の中にいる方がいらっしゃいます。イエスさまのみ言葉を伝え、まことの光を届けるためにこの身を用いていただくとき、ぶどうの枝である私たちが豊かに実るのです。もちろん、この「出かけて行って」は、物理的に遠くへ出かけていくことだけを指しているのではありません。祈ること、聖書を読んで家族や友と分かち合うこと、奉仕することなど、その人その人に神さまが与えられた使命を果たすことを望まれているのです。

「わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」「わたしにつながっていないと枯れてしまう」「枯れた枝は焼かれてしまう」というイエスさまの厳しい言葉を聞いて、自分など、真っ先に取り除かれ、枯れて焼かれてしまうのではないかと不安になる方も多いことでしょう。しかし、イエスさまは「ちゃんと実を結ばない人、つながっていない人は知らないよ」と突き放すお方ではありません。あなたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選んだのだから大丈夫だと心強い言葉で安心させてください。イエスさまにつながり、互いに愛し合う、そのことだけを守れば、私たちは喜びに満たされるのです。

イエスさまを通して、神さまとつながり、兄弟姉妹とつながることのできる幸いに感謝し、神さまの喜びに満ちた実を結ぶために、日々歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- イエスさまとつながっていることを実感するのはどのような時ですか？
- 皆さんは、どのような実を結びたいと思いますか？

3月3日（日）ヨハネによる福音書15章1-17節

1「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2わたしにつながっていなから、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。3わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。4わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。5わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。6わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。7あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。9父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。10わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

11これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。12わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。13友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。14わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。15もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。16あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。17互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

イエスさまの十字架後約2,000年が過ぎて世界中にクリスチャンが増えました。牧師の宣教や教会の働きを通してイエスさまとクリスチャンは今も繋がっています。

神が宇宙万物と地球上の生命と人も創られたことは、神の一方的な業であると同時に、愛も又一方的な神の愛です。神の愛を知らず、信仰に基づかない人間関係では、互いに助け合う事も難しいのではないのでしょうか。

3月4日（月）イザヤ書5章1-2節

1わたしは歌おう、わたしの愛する者のために
そのぶどう畑の愛の歌を。

わたしの愛する者は、肥沃な丘に
ぶどう畑を持っていた。

2よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り
良いぶどうが実るのを待った。

しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。

ここで神が植えた「ぶどうは酸っぱい実をつけた」をどう解釈したらいいのでしょうか。

良い実をつけるには、聖書を学び、イエス様の教えに少しでも近づく事が必要です。

3月5日（火）エレミヤ書2章21節

わたしはあなたを、甘いぶどうを实らせる
確かな種として植えたのに
どうして、わたしに背いて
悪い野ぶどうに変わり果てたのか。

神は人に、「善」と「悪」の両方の種を植え付けられましたが、イエスさまを信じ、聖書の教えに従えば、「善」の種が芽生え、枝となってイエスさまと云う木に繋がります。

3月6日（水）ヨハネによる福音書13章1節

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

イエスさまは十字架上で、逃げ去った弟子達も含め、恨みも罵りもせず、父なる神に彼らの赦しを乞い、「彼らは自分が何をしているのか分らないのです」と祈られました。

3月7日（木）ヨハネによる福音書14章1節

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。

私はクリスチャンになる前、困難に直面するとイライラ悩む事を繰り返して来ました。現在もたまに悩む事があると、先ず神に祈り、現況をありのままに報告すると、何故か心は落ち着きます。

3月8日（金）ヨハネによる福音書14章15-17節

15「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。16わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。

聖書を通して、イエスさまの教えを学ぶ事により聖霊がより良い方向を教えてください。この事をノン・クリスチャンの方に理解してもらうのは、なかなか難しいものです。

3月9日（土）ヨハネによる福音書16章20-22節

20はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。21女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。22ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。

私の娘夫婦は今、1歳半の双子を育てています。

子供を育てる事が、こんなに大変だと思わなかった、と。両親は苦勞して自分達を育ててくれたんだと言っていました。人の感性は同じ体験をしてみないと、他人の痛みは解りません。

第50課 「しかし、勇気を出しなさい」

聖書箇所：ヨハネによる福音書16章25-33節

主題聖句：しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。

(ヨハネによる福音書16章32節)

ヨハネによる福音書の14章から16章は「告別説教」と呼ばれています。最後の時を悟られたイエスさまが語る言葉は、今日の箇所にもある通りたとえ話を用いることも無く、大胆で力強いメッセージとなっています。続く17章は丸ごとイエスさまの祈りであり、18章ではユダの裏切りによって十字架への道が始まります。もちろんイエスさまはご自身が復活されることをご存じでしたが、弟子たちの目には永遠の別れと映るであろう十字架の前に、大切なことを伝えようとされたその言葉から、私たちが学んでまいりたいと思います。

とは言ったものの、告別説教は全体的に言葉が難しい・・・というのが正直な感想です。実は16章の前半では弟子たちも困惑している姿が記されており、「何のことだろう」「何を話しておられるのか分からない」等と論じ合っています。かつてイエスさまは、たとえを用いて話す理由を、弟子以外の人たちは「見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである」(マタイ13:13)と話されました。そして今日の箇所では「もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る」と仰っているのですが、やっぱりたとえ話が無いと難しい。弟子たちも、もちろん私たちがイエスさまの前にはあまりに不完全だと思い知らされます。弟子たちが互いに論じ合えたように、私たちがこうして共に御言葉について語り合えることが、自分の欠けを補う主の恵みだと感じます。

16：26その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。

イエスさまは16章の中で、ご自身が去った後に送られる弁護者、すなわち聖霊について繰り返し語っておられます。ですから、「その日」とは弟子たちが聖霊を受けた日、ペンテコステと考えることができます。イエスさまは、正に続く17章がそうであるように、祈りによって神さまと私たちの間を執り成して下さいました。イエスさまが地上を去られてからは、聖霊の助けを受けつつ人々が自ら神に祈ることになるのですが、それでもイエスさまの執り成しは変わらず続きます。私たちが祈りの結びに「イエスさまの御名を通して祈ります」と言うのも、祈りをイエスさまに委ね、父なる神へと届けていただく。執り成していただく。そのような思いに基づいています。

16：27父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。

この箇所は、穿って捉えれば「イエスさまを信じなければ神は愛してくれないのか？」と読めます。しかし私たちの信仰において、子なる神イエスと父なる神は一体であり、イエスを愛さずして神を愛することはできません。もちろん、十字架にかけられながらも敵対者のために祈ったイエスさまのように、神は御自身を愛さない者にも愛を注がれます。しかし結局、イエスさまを愛することが無ければ、神の愛に気付くことすらできないのです。

こうしたイエスさまのお言葉を受け、弟子たちは「あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます」と応えます。一種の信仰告白とも言えるでしょう。しかし今は告別説教をされている時です。数年間そばにいて、たくさんの御言葉や奇跡に触れてきたはずの弟子たちに、イエスさまが「今ようやく、信じるようになったのか」と仰るのも無理のないことです。

そして、ようやく信じるようになった弟子たちが、直後にイエスさまを見捨てて逃げていくことすら主は見破られています。それでも「**しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。**」とイエスさまは語られるのです。人として世に来られたイエスさまは、私たちと同じように感情を持たれていましたから、十字架という苦難への恐れも感じていらっしゃいました。そのイエスさまが、父なる神によって力と励ましを受けて、これから来る苦難にも堂々と立ち向かおうとされているのです。

16：33 あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。

イエスさまが「世に勝っている」と仰るこの御言葉は、正に父なる神への100%の信頼から生まれたものではないでしょうか。私たちは、「世」の価値観や、自分自身の感情に振り回され、イエスさまのように100%の思いになかなか至れなかったり、至ったとしても瞬間的であったりするかもしれません。信仰を告白したそばから、逃げ出した弟子たちのようにです。

だからこそ、「あなたがたがわたしによって平和を得るためである」と語られたイエスさまの御言葉を生涯聞き続け、聖霊の助けを受けつつ、父なる神さまの元へと日々立ち返っていく。それがイエスさまの願われたことだと信じています。苦難をも恐れないイエスさまの姿に勇気をいただきながら、私たちも世に負けることなく、信仰の道を歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- イエスさまの言葉から勇気を貰った経験、背中を押された経験などについて、分かち合いましょう。
- 日々の中で、信仰が揺らぎそうになる時はありますか。またそうなった時のために、心がけていることはありますか。

3月10日（日）ヨハネによる福音書16章25-33節

25「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。26その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。27父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。28わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」29弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。30あなたが何でもご存じて、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」31イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。32だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。33これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

初めに「たとえ話」を聞かされていたお弟子さん達は分かるようで分からないような感じであったと。「父について知らせる時」に「あの時にイエスさまが話された『たとえ話』はそういう意味だったのか」と目が開かれたのだと思います。

3月11日（月）ヨハネによる福音書17章1-3節

1イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。2あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。3永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。

永遠の命とは「本当の神さま」と「その神さまが私たちの為にこの世に与えてくださった独り子、イエスさま」を神の子、救い主であると認めること、信じること、（それが真実であることを）知ることですね。

3月12日（火）ヨハネの手紙15章5節

だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。（5:1）神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。（5:4）私たちを「神さまから生まれた者」とさせてくださることが恵みですね。



3月13日（水）テサロニケの信徒への手紙一 2章1-2節

1兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがそちらへ行ったことは無駄ではありませんでした。2無駄ではなかったどころか、知ってのとおり、わたしたちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした。

主がパウロを「福音を宣べ伝える者」として用いられた要因がここにあると思います。これほどの用いられ方は無いにしても、私たちも一人ひとり何かしらの役割が与えられており、それを実行するために必要な御霊が日々与えています。そしてどんな時でも勇気づけて下さる神さまがおられます。

3月14日（木）ヨハネによる福音書12章32-33節

32わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」33イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。

復活したイエスさまが王さまや祭司、群衆の面前で復活した姿を現し、その場で天に上げられた方が簡単に信じる人を増やせたのではと思えます。でも、そうせずにお弟子さん達に宣べ伝えていくことを委ねた理由。「一人も滅びないで永遠の命を得る」ために必要なことなのかもしれませんね。

3月15日（金）ヨハネによる福音書1章4-7節

14言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

「恵みの上に、更に恵みを受けた。」、神さまから日々頂いている恵みの上に、イエスさまからの更なる恵みを私たちは受けています。そのあふれるほどの恵みを実感するだけで喜べますね。

3月16日（土）ヨハネによる福音書14章6節

イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。

「イエスさまを通る」、いろいろと解釈出来そうですが、イエスさまのこの世での「行い」をたどっていく、イエスさまのみ跡に従っていく。勿論、イエスさまのように出来ないことの方が多いかもかもしれませんが、その様にありたいと願い、歩んでいくこともひとつなのだと思います。

第51課 「真理とは何か」

聖書箇所：ヨハネによる福音書18章28－38節

主題聖句：「わたしは真理について証しをするためにこの世に来た」

(ヨハネによる福音書18章37節)

今日の聖書は、ユダヤ人たちの訴えにより逮捕されたイエスが、ローマ総督ピラトのもとに連れていかれ、裁判を受けるお話しです。ピラトはローマ帝国から派遣された行政長官で、ユダヤ地方の支配を任されていました。そんなピラトの権力を利用しローマの法で裁きイエスを死刑にしようとするユダヤ人たちの必死さが見えます。

ピラトのもとにイエスさまを連れてきたユダヤ人たちはピラトの官邸には入りませんでした。過越の食事が食べられなくなることをないように、汚れを受けまいとしているのです。罪なき神の御子を裁くという大罪を犯しながら、異邦人の家に入って汚れることを恐れたのです。羊の血つまりメシアの死によって贖われるという預言の成就を大切に、自分たちの律法の規定を守ること、自分たちの正しさが守られると信じて疑わない姿勢を、ヨハネ福音書は偽善だと皮肉を込めて記しています。

さて、ピラトの裁判を見てみましょう。ユダヤ人たちの告発の理由はなんとも歯切れの悪いものでした。「とにかく悪い人なんです、悪いことをしたんです」という感じです。「宗教的なことでしょ、そっちでやってよ」というのがピラトの本心で、ユダヤの法で裁くよう提案します。しかしなおも食い下がるユダヤ人たちに押し切られ、ピラトはイエスに尋問を開始します。ピラトにとって最大の関心事は、イエスがローマ皇帝カイザルの脅威になるかどうかということでした。「おまえはユダヤ人の王なのか」と尋ねていますが、ローマに対して反逆の意思があるのか、カイザルの敵なのかを確認しているのです。それに対してイエスさまは、この世には属さない国の王なのだ、と言われました。「なんだ、この世にはない国の王なのか。宗教の世界のたわごとか」とピラトは思ったのでしょう、イエスに罪は認められないし、カイザルの脅威にはならないと判断しました。

「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」ヨハネ18：37

ピラトは「真理とは何か。」と尋ねていますが、真理を知りたいという信仰心で聞いているのではなく、「真理？なんだそれ？」程度の関心度でした。真理そのものである方が目の前にいるのに、ピラトは政治的な問題にしか関心がなかったため、イエスさまが示される真理とはなにかを考えようとしなかったのです。

私たちにも有り得るピラト的な過ちとは何かを考えたいと思います。

①絶対的な真理などない決めつけ、真理を求めないことです。

ピラトにとってローマ帝国とカイザルが一番大事で、ほかのことはどうでもよかったのです。だからピラトは真理を求めもしないし、知ろうともしませんでした。しかし十字架の死を目の前にしながらも、そんなピラトと向き合おうとしているイエスさまは、ひとりでも多くの人が救われるよう切に願っておられます。

②強者こそ正しいという固定観念に囚われていることです。

ローマよりユダヤが強いはずがない、多数派は強いに決まっている、カイザルよりイエスが偉大なはずがないと思い込んでいます。総督としてユダヤ地方を治めていますが武力で抑えついたり、自らの責任が問われることはできるだけ回避し、地域の問題に真摯に取り組むこともなかったようです。武力や権力で人や国を支配することは神さまの摂理に適いません。

③目に見えるものしか信じないことです。

自分の知識、常識でしか物事を見られない人は、目が曇り真理が見えません。ピラトにとってはカイザル、ローマ帝国、軍隊、法がすべてでした。イエスさまは真理についてピラトと語り合おうとされています。

イエスさまの治める国はこの世に属しませんが、世の中には存在しています。難しいですが、それは支配することと仕えることの違いではないかと思います。天の父のもとから来てくださった神のひとり子であるイエスさまのことを、求めないし知ろうともしないピラト的な生き方では、その違いに気づけないでしょう。「真理？それは何ですか？ぜひ教えてください」と謙虚に聞くことが大切です。そして真理について知ったなら、私たちの隣人やピラト的な人にも宣べ伝えて仕えていくことを主は望んでおられます。

真理は真実とも訳されます。私たちの歩みはこの真理・真実によって決められ結ばれ進められます。そして私たちはこの世に対して、神によって遣わされた者として立っています。弱さと限界を持つ私たちですが、イエスさまが差し出しておられる救いの真実を受けとり、神と人に仕えたイエスさまを見上げ、み言葉に聴き信頼し、福音が全世界に伝わるよう祈りを合わせ共に仕えてまいりましょう。

～分かち合い～

- ピラト的な人に本当に大切なものは何かを伝えるために、どうしたらよいか考えてみましょう。
- 「真理」は真実、愛、救い、守り、導きなど言い換えることができます。ほかに思い浮かぶ言葉は何ですか？

3月17日（日）ヨハネによる福音書18章28-38節

28人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。29そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。30彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。31ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。32それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。33そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。34イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」35ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」36イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」37そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」38ピラトは言った。「真理とは何か。」

真理とは、イエスさまご自身のことです。イエスさまは神の子であり、私たちの罪の身代わりになり、十字架に掛かって死なれ、3日目に死より復活されました。このお方を信じる者は、その罪が赦され永遠の命へと入れられます。イエスさまを信じるのが許され、感謝いたします。

3月18日（月）ヨハネによる福音書16章13節

しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。

イエスさまはご自分が亡くなる前「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さい。この方は、真理の霊である。」(14:16,17)と言う約束を下さいました。この方は神さまの真理を語られます。そして、私たちに日々語りかけ、真理を悟らせ、お支え下さり、助け、守り、お導き下さいます。

3月19日（火）テモテへの手紙一6章13節

万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。

イエスさまは、神さまとポンティオピラトの面前で「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。」(ヨハネ18:37)と宣言されました。私たちにもこの世で信仰を告白する祝福の力が与えられていることを感謝いたします。

3月20日（水）ヨハネによる福音書 | 7章 | 7-19節

17真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。18わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。19彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。

イエスさまは神さまに「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守って下さることです。」(15)と弟子たちのためお願いされました。同じように私たちが滅びへ行くのではなく、真理の神さまのご愛によって私たちを救って下さるようと、神さまにとりなして下さることを感謝いたします。

3月21日（木）ヨハネによる福音書 | 2章 | 23-24節

23イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。24はつきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

「父よ、できることなら、この盃をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願い通りではなく、御心のままに。」(マタイ26:39b)十字架を前にイエスさまはゲッセマネの園で、訴えるように祈られましたが、私たちが(世界中の人々)を救うために進んで行かれました。恐れ多くも感謝申し上げます。

3月22日（金）詩編22編 | 6節

口は渴いて素焼きのかけらとなり
舌は上顎にはり付く。
あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。

「乾く、と言われた。こうして聖書の言葉が実現した。」(ヨハネ22:16)「なぜ私をお見捨てになるのか。」(詩22:2a)「あなたにより頼んで、裏切られたことはない。」(6b)想像を絶するイエスさまの精神的葛藤と肉体的苦痛、それを超える救いの完成への熱望を込めて祈られています。

3月23日（土）詩編22編 | 7-19節

17犬どもがわたしを取り囲み
さいなむ者が群がってわたしを囲み
獅子のようにわたしの手足を砕く。
18骨が数えられる程になったわたしのからだを
彼らはさらしものにして眺め
19わたしの着物を分け
衣を取ろうとしてくじを引く。

想像を超える苦しみを伴う、残酷な十字架刑の後「くじ引きで決めよう。」と話し合った。それは「わたしの衣服のことでくじを引いた。」という聖書の言葉が実現するためでした。(ヨハネ19:24、25) 預言の通りにことが進められていき、預言の成就の確かさと人間(自分たち)の愚かさに驚かされます。

第52課 「成し遂げられた」

聖書箇所：ヨハネによる福音書19章17-30節

主題聖句：イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、
頭を垂れて息を引き取られた。（ヨハネによる福音書19章30節）

今週の聖書教育誌の週題は「成し遂げられた」です。福音書の著者ヨハネは聖書にこう記しました。

19:16 ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。こうして、彼らはイエスを引き取った。

ピラトは実際にはイエスさまを十字架刑を執行するローマ兵に引き渡したのですが、ヨハネは真実として十字架につけたのはユダヤの宗教指導者でありユダヤ人であることを示すために「**彼ら**」と記しました。

ユダヤの宗教指導者や、それに扇動されたユダヤ人はイエスさまを大祭司アイアファのところからローマの総督官邸にいた総督ピラトのもとに引き出しました。ピラトは尋問しましたが「**この男に罪を見出せない**」と告発した宗教指導者やユダヤ人(彼ら)に告げました。神の子と自称したので死罪にあたる「彼ら」は強く主張したのでピラトは恐れます。ローマ総督として群衆の暴動はどんな理由であろうとも避けねばならないものでした。「**お前はどこから来たのか**」と再度イエスさまに自分には釈放する権限も十字架につける権限もあると問いかけます。イエスさまは答えて「**神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。**」と言われました。ピラトはますます恐れて釈放しようと思いましたが、「**彼ら**」は「**王と自称する者は皆、皇帝に背いています。**」と強く迫りました。祭司長たち群衆の「**彼ら**」は「**わたしたちには、皇帝のほかには王はありません**」とピラトに言い放ったのです。「**彼ら**」は皇帝を自分たちの王とは決して認めていないのになんという二枚舌でしょうか。信仰と世俗を使い分けているのです。

ピラトはこの言葉で決断します。それはあくまで「**彼ら**」の言葉によつての決断であり自分には責任がないと考えたのです。

聖書を読む私たちはそのような「**彼ら**」の姿勢に嫌悪感をいだかれることでしょう。けれども、今を生きる私たちも信仰生活と社会生活を二面性をもって使い分けていることに思い当たることがないでしょうか。私は、これを自分に問いかけた時に自分の弱さを恥じ入りました。そして、私もイエスさまを十字架につけた一人であることを思い知らされるのです。それは、他の福音書にはないのですが罪状書きにヘブライ語、ラテン語、キリシア語で書かれたとあるようにユダヤ人だけの罪ではなく、罪ある異邦人にも現代の私たちにもキリストを十字架につけた者であることを自覚するようにヨハネは知らせているのです。

詩篇22:30～32

命に溢れてこの地に住む者はことごとく

主にひれ伏し

塵に下った者もすべて御前に身を屈めます。

わたしの魂は必ず命を得

子孫は神に仕え

主のことを来るべき代に語り伝え

成し遂げてくださった恵みの御業を

民の末に告げ知らせるでしょう。

この詩篇のみ言葉はイエスさまが十字架の上で最後に祈られた詩の最後の節です。冒頭の節は「受難のメシア」は人としての絶望的な苦悶のなかにあってもなお主を信頼し祈願する祈りです。十字架のキリストにこの祈りが写し出されます。23節からは感謝の歌となります。絶望は絶望にとどまらず悔い改めるならば神の力によって復活を喜ぶ民へと転換していただけると謳います。すなわち「死から新しい命に生き続ける者」へと導かれ、この「神の救いの業」の恵みは私たちにも私たちの未来を生きる子供たちにも及んでキリストが「成し遂げてくださった恵み」に与ることが赦されるという幸いな預言がなされているのです。

19:28 この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。

海綿に浸された酸いぶどう酒をヨハネはあえて「ヒソプ」に浸してイエスさまの口元に差し出したと記します。これを聞いたユダヤの人は誰でも過越しの小羊の救いの血を「ヒソプ」で家のかもと入り口に塗ったことを思い起こし、イエスさまこそがすべての人を救う真の救い主であることに気づくのです。それは、今もなおイエス・キリストを十字架につけつづける私たちも信仰に立ち返り、悔い改めることによって罪が過ぎ越し、救われると知らせているのです。

19:30 イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

イエスさまは最後に「成し遂げられた」と言われました。父なる神の「み旨」を成し遂げられたと宣言されたのです。口語訳聖書では「すべてが終わった」と書かれています。成し遂げられた・終わったということは、そこですべてが終えてもう後がないことではなく、成し遂げられた後には、それに続く永遠の未来があるのです。世に打ち勝った勝利の未来です。イエスさまはその喜びを表され平安のうちに安息されたのです。

私たちは世にあって、人間中心(エゴ)、世の出来事に目を奪われます。また、振り回されもします。自分が何を信じているかさえ時として見失うときがあります。イエスさまを十字架につけ続けている存在でもあります。そんな私にイエスさまはいつでも十字架を思い起こしなさいと言われてるように示されています。

私の救い、あなたの救いはすでに十字架により「成し遂げられた」のだとイエスさまの眼差しは私、そしてあなたに注がれています。この信仰に堅く立ち続けたいと願っています。

～分かち合い～

- 信仰生活と社会生活であなたが、悩む場面があれば分かち合ってみましょう。

3月24日（日）ヨハネによる福音書19章17-30節

17イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。18そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。19ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。20イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。21ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。22しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。

23兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡すようにした。下着も取って見たが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。24そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、

「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた」

という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。25イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロバの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。26イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。27それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

28この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。29そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。30イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

イエスさまは「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。天の父は愛する私たち人間を救うご計画を立て、イエスさまを地上にお遣わしになりました。そして、イエスさまは十字架という栄光を成し遂げられました。「愛するわが子よ...。よくやってくれました。3日後まで私のもとで、ゆっくりと休みなさい」と言われたかも。神さま、イエスさま、罪深い私たちのためにありがとうございます。

3月25日（月）ルカによる福音書14章15-17節

15食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。16そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、17宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。

イエスさまを信じる私たちを、宴会の準備ができましたからと招いて下さいます。イエスさまと一緒に、楽しくおいしい食事をいただきましょう。感謝致します。

3月26日（火）ゼカリヤ書9章9-10節

9娘シオンよ、大いに踊れ。
娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
見よ、あなたの王が来る。
彼は神に従い、勝利を与えられた者
高ぶることなく、ろばに乗って来る
雌ろばの子であるろばに乗って。

10わたしはエフライムから戦車を
エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ
諸国の民に平和が告げられる。
彼の支配は海から海へ
大河から地の果てにまで及ぶ。

まさにイエスさまを預言しています。高ぶることなく、ろばに乗って来る。諸国の民に平和が告げられる。彼の信仰の支配は-海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ。世界中の人びとがイエスさまを知り、隣人を愛して、世界が平和になりますように。

3月27日（水）ヨハネによる福音書17章4－5節

4わたしは、行くようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。5父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

イエスさまは十字架という栄光を成し遂げて死んでいかれました。イエスさまは私たちに多くのみ言葉を、愛を与えて下さいました。わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。イエスさま、ありがとうございます。

3月28日（木）ルカによる福音書8章2節

悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、

七つの悪霊を追い出していただいたマグダラのマリア。苦しみの日々が続いていました。自分で自分を思うようにできず、悪霊に支配されていました。孤独と絶望の日々。そんな私をイエスさまは救って下さいました。暗やみの中に明るい光がさしました。その喜びは何にもかえられません。

3月29日（金）ヨハネによる福音書19章25節

イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。

私の子が……。私から悪霊を追い出してくれた救い主が……。今、殺されようとしています。悲しみを通り越して、胸が張り裂けんばかりです。ああ 神さま……。

3月30日（土）ヨハネによる福音書19章38－42節

38その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。39そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。40彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ。41イエスが十字架につけられた所には園があり、そこには、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった。42その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かったので、そこにイエスを納めた。

ヨセフは勇気をもってピラトの前に願い出ました。天国のイエスさまは「ヨセフ、ニコデモよ。わたしの体を十字架から降ろし、きれいにしてくれて、包んでくれて、ありがとう」と言われたかも…。イエスさまは3日後にその体にお入りになり復活されます。人びとに希望を与えるために。

第53課 「わたしもあなたがたを遣わす」

聖書箇所：ヨハネによる福音書20章11-23節

主題聖句：父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。

(ヨハネによる福音書20章21節)

今週の聖書教育誌の週題は「わたしもあなたがたを遣わす」です。マグダラのマリアは墓の前でひとり泣いていました。安息日が開けて後、日が昇る日曜の明け方にマグダラのマリアは何人かの女性と共にイエスさまの弔いをしようと納められた墓に駆けつけました。彼女たちの心境はいかばかりであったのでしょうか。番兵が墓の入り口を封印して寝ずの番をしていることも承知でした。ところが不思議なことに行ってみると番兵はおらず、墓の入り口の扉の石は取りのけてあったのです。しかし、墓のなかにイエスさまはおられませんでした。驚き、急ぎ戻りペテロ達に涙ながらに事の次第を伝えました。

20:2 「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

話を聞いても何が起こったのか分からないペテロともう一人の弟子はマリアとともに墓に戻ります。墓の中はイエスさまを包んだ亜麻布だけが置いてありました。二人の弟子は何が起こったのか理解できないままにマリアを残して彼らの家に戻っていきました。マリアは一緒には戻りませんでした、いや、戻ろうとしなかったのです。

マグダラのマリアは七つの悪霊に取りつかれ、他人からは忌み嫌われた罪を犯していたといわれましたが、イエスさまによって癒され、暗い過去の生活も清算し、心身ともに健康を取り戻すことができたのです。その恩人であり、敬愛していた方が理不尽にも十字架で殺され、何もお世話をすることが出来ないままに墓に納められたイエスさまの遺体は取り去られていたのです。マリアはせめて、亡くなられたとしてもイエスさまの墓を守って残りの人生を捧げたいと願っていたのではないのでしょうか。イエスさまと共にあった過去の思い出を頼りに生きようとしたのではないのでしょうか。ところが、その遺体がどこにもなく、寄り添うことすらできないとマリアは泣き叫ぶのです。

20:13 「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

ここにマリアや弟子たち、そして罪人たちの現実があります。イエスさまを失なったことにより彼らの人生には希望がなくなり、再びイエスさまに出会う前の暗闇の支配する世界に戻ることになってしまうのです。マリアは死の世界に行かれたと思ってイエスさまを探します。そして、探し出して自分が引き取ろうとさえしているのです。マリアが墓から振り返ると一人の人が立っていました。

20:15 「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」

暗闇の世界を見ているマリアには、マリアの前に立たっておられる方がどなたなのかが分かりません。

20:15 「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」

暗闇と死の世界の墓の方を見ながら、死の世界に行かれた「わたしの主」を「引き取ります」と、自分だけで取り戻そうとしているのです。しかし、もはやイエスさまは暗闇と死の世界にはおられないのです。

「**マリア**」と、イエス様は墓とは正反対の方に立たれて声をかけられます。マリアは暗闇の世界から振り向き、初めて気がつきます。「**ラボニ**」は「先生」という意味であり、聖書では互いに名を呼び合うのは生きた人格の交わりがあることを知らせています。マリアは目がひらけ「**復活のイエスさま**」に出会ったのです。驚き、喜ぶマリアにイエスさまは私の元にとどまっていなくて、急いで、この「復活した」という「**良き知らせ(福音)**」を弟子たちに知らせなさいと促されてマリアは「**20:18わたしは主を見ました**」と弟子たちに知らせたのです。

私たちの「回心」も思い返せば、マリアと同じような体験をしてきたのではないのでしょうか。暗闇の世界に生きていた時に、一筋の光が当てられ、その光から招かれてイエス様との出会いが実現して信仰に導かれた経験をどなたもされたことでしょうか。また、今、光が当てられている方も、時がきて同じ体験をなさることを主に期待し信じています。信仰を与えられた方は、聖霊の導きを受けてその「**良き知らせ(福音)**」を隣人に知らせる者へと変えられていくのです。

マグダラのマリアが復活のイエスさまに出会った週の初めの日の夕方に、イエスさまは復活なされたお姿で弟子たちのもとを訪れてくださり「**20:19あなたがたに平和があるように**」と言われました。これは弟子たちにあらゆる良いものを備えてくださる意味であり、あらゆる問題から救われるということです。そして、このみ言葉は今日の教会にも、キリスト者となった私たちにも語りかけてくださるみ言葉なのです。

20:21「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

弟子たちにイエス・キリストは私たちを贖い救うために神の愛の権威を持っておられるお方であることを宣べ伝える使命をお与えになりました。これはイエスさまが弟子たちの働きを必要とされたということです。それは弟子だけでなく普遍的な使命とし現代の教会にも託されていることなのです。マグダラのマリアが「復活のイエスさま」を畏れと感動をもって初めて弟子たちに知らせたように、今日も教会も「復活のイエスさま」を宣べ伝えるために世に派遣されていくのです。

私たちの常盤台バプテスト教会はイエス・キリストから託された使命に生きる教会です。使命の重大さを覚え、果たして神の期待に応えられるだろうかと思案してしまう信仰の弱い私たちに約束してくださいました。

ヨハネ16:7~8「**わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする**」

ですから、私たちには**弁護者・聖霊**が守り導いてくださいますから恐れずに福音宣教のために働くことができるのです。私たちの教会が加盟している日本バプテスト連盟は新たに「今、共にキリストを証しするために～新たな『自立と協力』～各個教会・地域が主体となる協力伝道～」とのビジョンを示されて歩みだしています。ショートメッセージを聖霊のお導きを受けながら書かせていただいている私自身も「**わたしもあなたがたを遣わす**」のみ言葉から励ましを受けて新しい使命に一步、踏み出したいと示されました。

イースターおめでとうございます。主から託された福音宣教を皆さまと聖書のみ言葉を学びつつ心をあわせて共に担ってまいりましょう。

～分かち合い～

- あなたが出て行って伝えたいところは何処ですか。

3月31日（日）ヨハネによる福音書20章11-23節

11マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、12イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。13天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」14こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。15イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのであれば、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」16イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。17イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」18マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。19その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

神さまがイエスさまを遣わした様に、イエスさまは弟子たちを遣わすと言われ、神さまの聖霊を吹きかけられました。その繋がりの中に自分が置かれている事を思うと不思議と言いますか、小さい者ですが感謝してその一旦を担わせていただければ幸いです。

4月1日（月）ヨハネによる福音書20章24-29節

24十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」26さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いです。」

ここでも昨日と同じように、「あなたがたに平和があるように、」と言われ、傷あとを見せて触らせてくださり「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と言われます。例え戸惑うことに出あっても、トマスのように「わたしの主、わたしの神よ。」とお答えし、お従いして参りたいです。

4月2日（火）創世記2章7節

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

「命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」生きていても死んだような顔をしてしまう位に、苦しく辛い思いをしておられる方々が大勢います。先進国と言われる日本の国も同じでは無いでしょうか？そのお一人お一人の魂に、神さまの福音が届いて、神様の息（聖霊）が心の奥深くに宿りますように、どうぞ助けてください。

4月3日（水）ヨハネによる福音書20章30－31節

30このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。31これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

聖書がしるし(奇跡)を含めて書かれたのは、・・・イエスさまの名により命を受けるためであるとあります。若い頃、聖書を指し示す言葉の一つとして、「聖書は神様からのラブレター」と学びました。正に私たちを愛し、救い、憐れみ、慰め、癒し、励まし、守り、導き、時に叱咤して下さるみ言葉に感謝いたします。

4月4日（木）使徒言行録2章37－38節

37人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。38すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。

(十字架につけて殺したイエスさまが救い主?!)「私たちはどうしたら良いのですか?」と戸惑うのは至極当然でしょう。ペトロは責めず、修行も金銭も要求せず、端的になすべきことを話されました。「悔い改めてバプテスマを受けるなら、誰でも赦され、聖霊を受けます。」と言う、一方的な主の恩寵に感謝いたします。

4月5日（金）使徒言行録18章24－28節

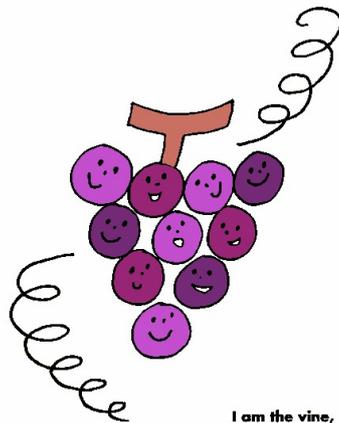
24さて、アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソに来た。25彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。26このアポロが会堂で大胆に教え始めた。これを聞いたプリスキラとアクィラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した。27それから、アポロがアカイア州に渡ることを望んでいたのも、兄弟たちはアポロを励まし、かの地の弟子たちに彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。アポロはそこへ着くと、既に恵みによって信じていた人々を大いに助けた。28彼が聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人たちを説き伏せたからである。

主にある仲間も、アポロに神さまの道をより正確に説明して、励まし、伝道したいと願う地で歓迎される様に手配します。アポロも恵みによって既に救われた人々を大いに励まします。皆が共に学び、一つになって宣教に邁進する姿に励ましを受けます。

4月6日（土）コロサイの信徒への手紙3章12－15節

12あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。13互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦して下さったように、あなたがたも同じようにしなさい。14これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。15また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。

私たち皆が神さまに選ばれて、聖なるものとされ愛されている。感謝いたします。主がそうして下さったので、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけ、互いに忍び合い、許し合うことをさせていただけるように、祈りつつ歩んでまいりたいです。



I am the vine,
you are the branches
John 15:5

2024.3 成人科